

計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

会報 2011-9

発行日：平成23年9月12日

発行元：（社）計画・交通研究会

目次

Opinion	1
志高き後輩たちへ	
News Letters	3-5
事業報告・活動報告	

□ Opinion

志高き後輩たちへ

八方 隆邦

「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」と言われるが、私の拙い経験から学んだことをお話しさせていただく。

私が東急電鉄に入社したのは昭和39年、東海道新幹線が開通し東京オリンピックが開催され、日本経済が最も高度成長している時代であった。最初に配属されたのは、今では当社の幹線である田園都市線の溝の口～長津田間建設工事を行う新線建設部で、以後46年間、当社の鉄道事業に携わり、現在は東急車輛も担当している。

入社当時は計算尺で設計計算を行い、図面を引き、それを持って現場管理を行う作業の繰り返しであったが、学校で学んだことを、設計から施設物の完成まで一貫して携わることができ、勉強にもなり、今では大変楽しい思い出になっている。

開通当時の田園都市線は4両編成で、二子玉川から現在の大井町線に乗り入れており、渋谷へは二子玉川まで銀座線を延伸する計画であった。その後、昭和43年都市交通審議会答申第10号の答申路線である11号線（営団半蔵門線）の建設が決定され、それに伴い二子玉川～渋谷間の旧玉電を地下化し、昭和52年に現在の田園都市線となった。建設当時の田園都市線は6両編成が最終計画であったが、地下区間の建設に際し、将来の大幅な需要増を予見して10両対応の施設とした。結果、半蔵門線との相互直通運転により都心へのアクセスが飛躍的に向上し、現在は10両編成で朝ラッシュ1時間当たり29本の運転を行っている。

田園都市線建設工事に携わった後も、平成2

年4月に工務部土木課長を拝命するまでの、27年間は殆ど工務部工事事務所で過ごすことになった。その間に多くの工事に関与する事となり、線路の直上や直下への切替工法の開発、駅前広場の計画と施工管理、また署官庁との協議や事業費の負担の有り方など、多岐にわたる経験を積むことができ貴重な財産となった。

どんな事業を行うにしても、必ずと言っていいほど困難な壁に阻まれ、悪戦苦闘することとなるが、そこで諦めてしまえば、それまでの努力が水泡となる。事業遂行上一番大切なことは「諦めない事」だと思う。

平成2年に工務部土木課長になった折、運よく東京工業大学の石原先生が主宰され森地先生も主要メンバーとして参加されていた、渋谷の開発に関する委員会に関与する事となり、この時の勉強が、現在進行中である東京メトロ副都心線と東横線の相互直通運転の原動力となっている。相互直通運転に関しては、渋谷が通過点となりターミナル機能が失われることから、社内には反対論が根強くあったが、煩雑な渋谷駅周辺を整理する千載一遇のチャンスであること、また田園都市線の実績からしても、相互直通運転により利便性が飛躍的に改善され、沿線価値の向上がはかれることなどから、当時の鉄道事業本部長として反対論者の説得には苦勞をした。現在、森地先生をはじめとし関係者のご努力により、渋谷駅周辺は特区に指定され、JR東日本、東京メトロ、当社による大規模開発が進みつつあり、来春には第一弾として東急文化会館跡に渋谷ヒカリエが開業する。

さて、事故からも多くのことを学んだ。事故は、私達に色々なことを教えてくれる教科書にもなる。

たとえば、平成13年7月に起こした田奈変電所火災事故では、直接原因は落雷であったが、変電所がダウンし列車運行ができない事から、復旧を急ぐあまり、電力司令所が、変電所に強制送電するといった人災が重なっていたことが判明した。このことから、一か所の変電所がダウンしても対応できるよう、当社線全体の変電所の見直しを行い、現在では隣接する変電所が同時にダウンしない限り、安定輸送を確保できる体制へと改修を行っている。また、この事故時に、折返し施設がある鷺沼まで運転を行ったが、同駅はバスのみで他の鉄道路線と接続しておらず、大混乱を起こさせてしまった。この反省から横浜市営地下鉄が接続する、あざみ野に折返し施設を設けた。

一昨年起こしてしまった多摩川駅での、線路への車椅子転落による死亡事故では、バリアフリー化を急ぐあまり、ホームなどの駅施設の勾配は従来のみで、その勾配は、介助者を含めた車椅子利用者の利用実態によっては、場所により危険因子となることを改めて認識させられた。この事故の教訓から、エレベータ周りの勾配の改修や、ポールを設置および注意喚起を行った。

事故は、どんなに長く鉄道に携わっていてもなかなか完全に防ぐことができない。事故の前では我々はまだまだ未熟であり、常に謙虚に想像力を働かせて取り組んでいかねばならないと思う。

さて、今後の課題である。どんな事業でも安全確保は最重要課題であるが、公共輸送機関と

して安定輸送の確保も疎かにできない。特に高齢社会を迎えた現在では、全盲の人のみならず、高齢者を含めた酔客などによる電車接触事故が多く、お客さまの安全上の課題ばかりでなく、運行支障の大きな要因となっており、ホームドアの設置も必須の要件となりつつある。ホームドア設置には、狭隘なホームや多様な車両の存在、そして、多額な整備費用などの諸問題があるが、積極的に取り組むべき課題である。

また、田園都市線の朝ラッシュ時の混雑率は、運輸政策審議会の答申にもある大井町線の溝の口までの延伸を実施したこともあり、198%から182%へと改善され、小田急線の複々線化が完成すれば、さらに改善することが期待できる。しかし、安定輸送の側面から見れば、田園都市線は東京メトロ半蔵門線、東武伊勢崎線と相互直通運転区間が100km余りにおよび、ひとたび輸送障害が起きるとダイヤが乱れ、この回復に時間を要する欠陥がある。この解決には、渋谷駅の2面3線化も視野に入れた検討が必要である。

さらに東横線・目黒線については、2019年度を目標に、新横浜経由で相模鉄道線との相互直通運転事業が進行中である。この事業を確実に推進することは無論であるが、運転形態が煩雑となることから、この対策も課題であろう。

これまで多くの課題に直面し、また、多くの失敗もしたが、その時々で決して諦めることなく全力で取り組んできた。鉄道は、今後も絶えず「安全・安心」を目指していかなければならず、それには鉄道を支えるひとりひとりの進化が必要であると考えている。これからの国内外の鉄道を支えるすべての志高き後輩たちに後を託したい。

(東京急行電鉄(株) 取締役技師長、当研究会評議員)

■計交研・当て塾共催セミナー

第XI講・第5回

- 日時：平成23年6月8日（水）17:00～20:00
- 場所：計画・交通研究会会議室
- 講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

災害列島日本におけるオートキャンプ場について

- 参加者：12名（うち計交研関係5名）

〔講義概要〕

◆災害列島におけるオートキャンプ場（鈴木忠義）

前回（2011.5.24）のセミナーで震災対応の総論を述べたが、今回は、東北地方太平洋岸の観光を踏まえ、一例として、被災時の活用地となるオートキャンプ場の考え方を解説した。

1. 新しい集落づくりとオートキャンプ場

被災地の集落づくりでは、適地を選定して、オートキャンプ場を整備することを提案する。なぜならば、救助から振興までの対策の5段階（堺屋太一氏）のそれぞれで役立つからである。

- ・「災害時」には、応急対策への功用
 - *陸前高田市のオートキャンプ場が仮設住宅となり実証済（「東北地域観光開発の構想計画と開発の指針（1968.2）」でオートキャンプ場を提案）
- ・「地域振興時」には、様々な活動が可能
- ・平常時は、キャンプ場+交流の拠点

東北の太平洋岸では、市町村ごとに高台の景色の良い所にオートキャンプ場を整備してはどうかと考える。災害時に活用できる場所となるとともに、平常時は、首都圏等からの自動車利用客のための楽しいツアーが形成できる。

2. 世田谷区民健康村事業の実例

オートキャンプ場が地域振興に役立つのは、交流の場となるからである。“交流こそ文化”と言われ、交流により文化が生まれて地域振興につながる。こうした交流を実践してきた実例として、世田谷区民健康村事業を紹介した。

世田谷区と川場村は、姉妹都市ではなく、“縁組協定”を結んでいる（1981年）。一環として、災害時の相互援助協定も結んでいる（1995年）。

都市が農山村に多くのものを一方的に求めるのではなく、住民どうしが交流を深め、双方が補い合って、区民の第二のふるさとづくりと村民のための村おこしを実践してきた。

■計交研・当て塾共催セミナー

第XI講・第6回

- 日時：平成23年6月29日（水）17:00～20:00
- 場所：計画・交通研究会会議室
- 講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

ドラッカー『マネジメント』と観光原論（1）

- 参加者：13名（うち計交研関係5名）

〔講義概要〕

ドラッカー学説の解説書である下記テキストについて、「観光原論」の諸説との関連を中心に、3回にわたって討論することとした。

〔テキスト〕NHKテレビテキスト 100分de名著「ドラッカー『マネジメント』」上田惇生（ドラッカー学会代表）、2011.5.25、A5判、115PP。
【第1回 感動のDNA】（P.10～33）

- 「傍らに立って見る者」であり続けた（P.10）
ドラッカーは「社会を見ること」にこだわった。社会のハード・ソフトの全体を的確に捉えて変化を見ることが重要である。
- 人生を運命づけた二冊の本との出会い（P.13）
ドラッカーは、二冊の本がのちの彼の社会に対する考えの基本になったと言う。観光の分野でも、それだけの影響力がある本を残したい。
- すでに起こった未来を見る（P.15）
ドラッカーは、既に起こったことを観察すればその先にある変化（未来）も見えてくると言う。現在を見て未来を考えることが重要である。
- 資本主義も社会主義も同じ穴のムジナ（P.18）
ドラッカーは、資本主義も社会主義も「経済至上主義」を基本にしていたと言う。日本でも、もの・かねに偏重し、人間の最終的な目的である幸福論が欠如していた。
- マネジメントが人間に幸せをもたらす（P.24）
ドラッカーは、人と人が一緒に働きながら幸

せになるためのマネジメントを示している。人々のモチベーションを金銭以外の社会的貢献で維持するといったマネジメントが必要である。

○文明の運命を握るマネジメント (P.32)

『マネジメント』は、人間を感動させ、幸せに導くために書かれた本と言える。観光も人間を感動させ幸せにする分野であり、このテキストを学ぶ意味があると考えた。

■計交研・当て塾共催セミナー

第XI講・第7回

●日時：平成23年7月13日(水) 17:00~20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

ドラッカー『マネジメント』と観光原論 (2)

②宇都宮大学工学部教授 永井護 先生

英国コーンウォール地方の鉱業世界遺産

●参加者：15名 (うち計交研関係6名)

〔講義概要〕

◆『マネジメント』と観光原論 (2) (鈴木忠義)
「第2回 何のための企業か」

○マネジメントの三つの役割 (P.36)

ドラッカーは、マネジメントの三つの役割を示している。その一つは“特有の使命を果たす”ことで、観光地が魅力的でなければならないことに通じる。二つ目は“働く人々を生かす”ことで、将棋と同じである。三つ目は“社会の問題に貢献する”ことで、「三方よし」である。

○企業が達成すべき五つの目標 (P.46)

ドラッカーは、マーケティング、イノベーション、経営資源、生産性、社会的責任の五つが企業の達成目標だとする。マーケティングは顧客のニーズを掴み、イノベーションは新しい切り口や活用である。観光旅館が、良さを残しつつ更新する必要があることに通じる。肉体労働、サービス労働、知的労働の生産性があり、観光ではサービス労働の生産性が重要である。

○企業は利潤を目的にしてはならない (P.56)

ドラッカーが示す企業の基本は、顧客の満足、従業員の満足、よりよい社会ということであり、「三方よし」の精神と同じである。

◆英国の鉱業世界遺産 (永井 護)

英国、コーンウォール地方の鉱山世界遺産の視察報告として、現地で見回った状況、世界遺産としての重要性や真実性、完全性をどのような考え方で示しているか等について紹介した。また、比較しながら、足尾の世界遺産としての考え方を考察した。

〔報告目次〕

I. 英国、コーンウォール地方の現地の紹介

II 世界遺産に関する考え方

■計交研・当て塾共催セミナー

第XI講・第8回

●日時：平成23年7月27日(水) 17:00~20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

ドラッカー「マネジメント」と観光原論 (3)

②ヒューマン・エデュケーション・サービス

権代美重子 氏

日本の食文化ー世界無形文化遺産登録に向けて

●参加者：13名 (うち計交研関係5名)

〔講義概要〕

◆「マネジメント」と観光原論 (3) (鈴木忠義)
「第3回 誰もがマネージャーになれる」

○マネージャーは指揮者である (P.62)

ドラッカーは、マネージャーにはオーケストラにおける指揮者の役割と「真摯さ」が求められると言う。リーダーの重要な資質である。

○マネジメントに必要な四つのスキル (P.65)

四つのスキルとは、意志決定、コミュニケーション、管理、経営科学である。日本では、経営科学すなわち手法論に偏る傾向がある。

○マネジメントは社長だけのものではない (P.72)

ドラッカーは、「これからはトップだけが経営や組織について学ぶ時代ではない」と言う。現場のしっかりしたマネジメントが重要である。

○何をもって憶えられたいか (P.81)

ドラッカーは「何をもって憶えられたいか」という意識を持ち続けることが自己の向上に繋がると言う。観光地も同様で、常に少しずつ良くなっていくことが重要である。

◆日本の食文化（権代美重子）

農林水産省が「日本の食文化」のユネスコ世界無形文化遺産登録を目指し動き始めた。登録は、その是正と日本への興味と関心をさらに高める契機となるだろう。登録には関係する地域や人々の幅広い参加と同意が条件となってお

り、まずは、日本人自身が食文化の理解を深め、その気運を高めていくことが必要である。

〔報告目次〕 1. 「日本の食文化」世界無形文化遺産登録の背景と目的／2. ユネスコ世界無形文化遺産とは／3. 「日本の食文化」の特徴／4. 登録後の課題

（文責：「当て塾」事務局 野倉 淳）

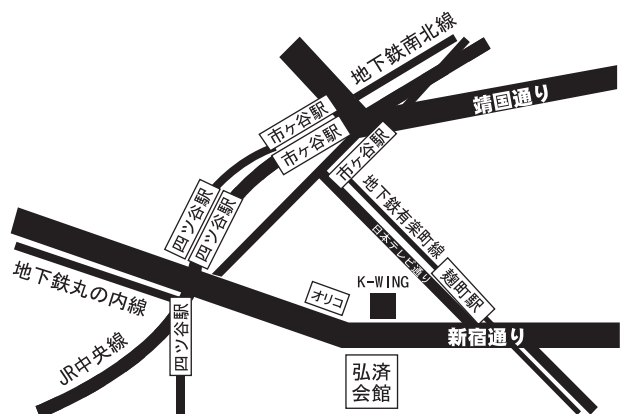
■秋の現場見学会

日程のみ11月24日（木）-25日（金）に設定
 いたしましたが、静岡県域を対象に企画を進め
 ており、近日中に会員の皆様にメールにてご案内
 申し上げます。

（社）計画・交通研究会

会長	森地	茂
副会長	石田	東生
副会長	家田	仁
副会長	屋井	鉄雄
事務局長	水野	高信
会報編集委員長	日比野	直彦

〒102-0083
 東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F
 TEL=03-3265-1774
 FAX=03-3221-5489
 E-Mail=
jimukyoku@keikaku-kotsu.org
 Homepage =
<http://www.keikaku-kotsu.org/>



（社）計画・交通研究会案内図

交通

JR中央線四谷駅麹町口から徒歩6分/地下鉄丸の内線四谷駅徒歩6分/南北線四谷駅徒歩7分/有楽町線麹町駅4番出口より4分
 弘済会館前の大きなビル（オリコ）の右隣、1階にドラッグストア（クスリ）の入った小さなビル。